

# 名詞句産出における形容詞の語順とその親密度との関係

藤木 大介  
(梅光学院大学)

Key words : 言語産出, 語順, 名詞句

## 方法

参加者 大学生 58 名(男性 11 名, 女性 47 名), 平均年齢 18.93 歳(SD = 0.67)であった。

刺激 主要部名詞として, 動物, 植物, 人工物, 抽象概念等を含むよう配慮し, 「犬」「木」「色」「机」「花」「道」「鳥」「香」の 8 語を用いることとした。

手続き 集団での質問紙による調査を行った。

質問紙 各行ごとに 1 つの名詞句が産出されるようにした。また, 各行に 1 つの単語が記入できる程度の大きさの両括弧を配置した。その右隣には, 主要部名詞を示した。また, 以下のような教示が示された。「カッコに当てはまる形容詞(例えば, 大きい)や, 形容動詞(例えば, 大きな)を記入し, 名詞句を完成させてください。ただし, 形容詞や形容動詞以外の語を絶対に入れないでください。」各主要部名詞はランダムな順で並べ, 並びの異なる 2 リスト作成した。

## 結果と考察

産出された形容詞に関し, 天野・近藤(1999)の音声単語親密度を調べた。その上で, 各参加者毎に前置名詞と後置名詞の評定値の平均を算出した。その結果, 全参加者の評定値の平均は, 前置形容詞では 6.09(SD = 0.12), 後置形容詞では 6.04(SD = 0.12)となった。対応のある  $t$  検定の結果, これら値の間の差は有意であり( $t(58) = 2.01, p < .05$ ), 第 1 形容詞の方が親密度が高かった。したがって, 名詞句を産出する際にはアクセス容易性の高い形容詞が前置されやすいといえる。

## 引用文献

- 天野成暁・近藤公久(編著) (1999). NTT データベースシリーズ「日本語の語彙特性」第 1 巻 単語親密度 東京: 三省堂.
- Bock, J. K., & Irwin, D. E. (1980). Syntactic effects of information availability in sentence production. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **19**(4), 467-484.
- Bock, J. K. & Warren, R. K. (1985). Conceptual accessibility and syntactic structure in sentence formulation. *Cognition*, **21**(1), 575-586.
- Ferreira, V. S., & Yoshita, H. (2003). Given-New ordering effects on the production of scrambled sentences in Japanese. *Journal of Psycholinguistic Research*, **32**(6), 66-692.
- MacDonald, J. L., Bock, K., & Kelly, M. H. (1993). Word and world order: Semantic, Phonological, and Metrical Determinants of serial position. *Cognitive Psychology*, **25**(2), 188-230.
- 麻柄啓一 (2001). 修飾語句の係り方の表記とその理解 読書科学, **45**(1), 19-26.
- Stallings, L. M., MacDonald, M. C., & O'Seaghdha, P. G. (1998). Phrasal ordering constraints in sentence production: Phrase length and verb disposition in heavy-NP shift. *Journal of memory and Language*, **39**(3), 392-417.
- Yamashita, H., & Chang, F. (2001). "Long before short" preference in the production of a head-final language. *Cognition*, **81**(3), B45-B55.

(FUJIKI Daisuke)

人間が言語を産出する際, その語順はどのようにして決定されるのだろうか。文の産出課題を用いた研究では, 有生名詞(MacDonald, Bock, & Kelly, 1993), イメージ容易性(imageability)が高い名詞(Bock & Warren, 1985), 旧情報(given information)を示す語(Bock & Irwin, 1980)等, 概念的にアクセスが容易な要素が前置されやすいことが示されている。また, このような概念レベルの要因に加え, 文を構成する要素の長さも影響を及ぼすことが示されており, 英語を対象とした研究では, 相対的に短い要素の方が前置されやすいこと(Stallings, MacDonald, & O'Seaghdha, 1998)が示されている。対照的に, 日本語を対象とした研究では, 主格-目的格などの正規語順にかかわらず, 相対的に長い名詞句が前置される傾向があること(Yamashita & Chang, 2001)が示されている。また, 名詞句内の修飾語の順序に関しても長い要素の方が前置されやすいこと(麻柄, 2001)が示されている。

このように要素の長さが語順に及ぼす影響が英語と日本語とで対称となる理由について, Yamashita & Chang (2001)は次のように説明している。日本語の場合, 動詞が後置されているため文の項の順が比較的自由であり, 概念レベルの要因が語順を決定する。対称的に, 英語の場合は項の順が厳格であるため概念レベルでの影響が減じられ, 形式レベルの要因が語順を決定する。相対的に長い要素は概念的により顕在的であり, 同時に, より形式的に複雑でもあるため, 概念レベルが重視される日本語では前置され, 形式レベルが重視される英語では後置される。この Yamashita & Chang (2001)の説明に基づくと, 英語でも日本語でも語順の決定はアクセス容易性の影響を受けるものの, 要素の長さ起因するアクセス容易性の内, 英語では形式レベルでのアクセス容易性が影響を及ぼし, 日本語では概念レベルでのアクセス容易性が影響を及ぼす, とまとめることができるだろう。実際, 日本語の文産出においても構成要素の長さにかかわらず概念レベルでのアクセス容易性の高い語が前置されやすいとする研究も存在し, Ferreira & Yoshita (2003)は, 先行文と記銘文とを呈示し, 先行文で呈示された情報(旧情報)が記銘文の再生の際に前置されやすいことを示している。

本研究でもアクセス容易性が語順を決定する要因となっているかを検討した。これまでの研究を参考にすると, 産出語順を検討するには文レベルを対象にする方法と名詞句レベルを対象にする方法とがあると言える。この内, 文レベルを対象とする場合, 文内の名詞句の語順を決定する要因としてアクセス容易性と同時に主語や目的語といった文法的な役割に関しても考慮しなければならない。そこで本研究では, 議論をより単純化するため, 名詞句の産出における修飾語の語順を検討対象とした。また, Ferreira & Yoshita (2003)とは異なり, 先行文脈にかかわらずアクセス容易性が語順の決定に影響を及ぼしているかを検討した。アクセス容易性が語順の決定影響を及ぼすならば, 名詞句の主要部名詞のみを定め, これを修飾する 2 つの形容詞を産出するように求めた場合, アクセス容易性の高い形容詞が前置されると予測される。アクセス容易性の指標として, 語の親密度を考えるならば, 産出された 2 つの形容詞の親密度を比較すると, 前置された形容詞ほど高親密である傾向が認められるだろう。